

元の韻の構造に就いて

著者	大島 正健
雑誌名	漢文學會々報
巻	3
ページ	1-4
発行年	1935-03-15
URL	http://doi.org/10.15068/00146660

元の韻の構造に就いて

大島 正健

一般に詩人の用ひる此韻の組立につき、疑問と爲る者あり。先づ人の熟知する唐の魏徵の述懐の詩を例として考究すべし。

中原還逐鹿、投筆事戎軒、從橫計不就、慷慨志猶存、杖策謁天子、驅馬下關門、請纓繫南粵、憑軾下東藩、鬱紆陟高岫、出沒望平原、古木鳴寒鳥、空山啼夜猿、既傷千里目、還驚九折魂、豈不憚艱險、深懷國士恩、季布無二諾、侯嬴重一言、人生感意氣、功名誰復論、

此詩を見るに軒、藩、原、猿、言の如きエンの聲を持てる者と、存、門、魂、恩、論の如きオン₁の聲を持てる者と、韻を爲して同韻として取り扱ふこと理に合はざれど、彼國の大家既に之を許容す、我國の詩人は一も二もなく其用法に随つて怪しむ所なきが如し。

是より時代を溯りて元の韻の現出せる來歴を探るべし。概して漢人の用ひたる韻法は緩きに過ぐる如く思はるゝが故、先づ魏詩より始めて用例を出だすこと、す。

曹植贈徐幹詩

驚風飄白丹、忽然歸西山、圓形光未滿、衆星燦以繁、下閑、間、天、軒、憐、全、篇、愆、然、年、宣、言と押す。

劉楨贈徐幹詩

誰謂相去遠、隅此西掖垣、拘限清切禁、中情無由宣、下言、遷、園、源、翻、連、懸、偏、焉と押す。
是より後は只韻脚のみを記す。

陸機、漢高祖功臣頌、言、敷、蘭、韓、權、原、安、難、藩、

潘岳、贈陸機詩、延、遷、言、軒、

左思、蜀都賦、晚、遠、垣、

陶潛、詠貧士詩、軒、闕、烟、研、言、賢、

顏延之、元后哀策文、闕、轅、軒、原、謹、援、

後の元の韻所屬の字は、初は山刪の韻と結び、次第に仙、先、の韻と結ぶこと多きに至るを見る。平聲の元の韻に對して、其入聲は月の韻なり。此韻の現出も、平聲の元の韻の現出と殆ど其時を同じうす。

曹植、洛神賦、月、雪、

傅玄、怨歌朝時篇、月、髮、越、闕、達、發、曷、闕、末、別、裂、絶、穴、

張協、雜詩、越、髮、說、月、別、節、察、

入聲の月の韻と鏽點の韻又薛屑の韻との關係は、平聲の元の韻と山刪の韻又仙先の韻との關係の如し。

次に元の韻のエン、エツの聲ある者に他のオン、オツの聲ある者の混入したるは、如何なる次第なるか、其迹を原ぬべし。漢魏の時代には、後世眞文の韻となるべき者は、廣く同韻に屬し居りたるが、イン、ウンの眞文の韻と爲りて分るゝに先だち、オンの聲の者は其の中に混じ居りたり。漢魏の人の作の數例を示すべし。

趙壹、窮鳥賦

鳥也雖頑、猶識舊恩、内以書心、外以告天、

蔡邕、七依

乃命長秋、使驅獸夷、羿作虞人、騰句喙以逐飛、騁韓盧以逐奔、

劉楨、贈從弟詩

鳳凰集南岳、徘徊孤竹根、於心有不厭、奮翅凌紫氣、

徐幹、齊都賦

砒股壘戾、壯氣無倫、凌高越險、追遠逐逝。

六朝の時期に入りてイン、ウンの聲を有する眞、文、の韻又イツ、ウツの聲を有する質、物の韻の夫々分離するに當りオン、オツの聲を有する韻は、他と分れて獨立せり。陸機、漢高祖功臣頌の存、昏、尊、門、昆。潘岳、西征賦の存、坤、恩、門。劉琨、答盧諶詩の婚、敦、奔、門、根、魂。陶潛、歸去來辭の奔、門、存、尊等に加へて、摯虞、鳩鵲賦の骨、浚、忽、潘岳西征賦の勃、骨。袁宏、三國名臣序贊の訥、骨、枕、勃、浚等は即ち其の例なり。

廣韻にてオン、オツの韻に對し平聲痕魂、入聲浚の名稱を設く。又眞を分ちて平聲臻眞と諄、入聲櫛質と術に作り、文を分ちて平聲欣文、入聲迄物に作る。上聲去聲の韻は夫々其間に置く。

さて元の韻月の韻を見るに、六朝の中期には他より分れて獨立せるものの如し。其當時は痕魂の韻は既に獨立せり。元、痕月浚混用の例の此時代の作者の詩歌に見ゆるは普通事と爲り來れり。

謝靈運、石門新營詩

躋險築幽居、披雲臥石門、苔滑誰能步、葛弱豈可捫、 下繁、敦、樽、翻、緩、猿、噉、奔、存、魂、論と押す。

鮑照、代東武吟

主人且勿誼、賤子歌一言、僕本寒鄉士、出身蒙漢恩、 下源、垣、奔、溫、存、論、門、豚、猿、怨、軒、魂と押す。

謝靈運、遊赤石進帆海詩

首夏猶清和、芳草亦未歇、水宿滄晨暮、陰霞屢興發、 下髮、發、月、越、闕、忽、伐と押す。

顏延之、赭白馬賦

徒觀其附筋樹骨、垂梢植髮、雙瞳夾鏡、兩權協月、 下發、浚、闕、越と押す。

是れより以後は、元痕の兩韻は其平上去入を通じて、同韻として取り扱はれ、宋代に至り痕の韻の省かるゝ結果として元の韻は二様の聲あるに拘はらず、一韻として作詩に用ゐらる。作詩の習慣上の用法は姑く措き、元痕兩韻の併用せらるゝに於いては之に對する適當の説明無かるべからず。想ふに南朝劉宋の項元の韻に音變化を生じ、南音化せられしものなるべし。此音我國傳來の吳音を以て説明するときは該當するに似たり。翻譯をホンヤク、煩惱をボンナウ、軒廊をコンラウ、言語をゴンゴ、祇園をギラン、怨癡をランリヤウ、發端をホツタン、越智をラチと呼ぶが如し。獻をコン、權をゴンと唱ふるは、當時兩字元の韻に屬し居りたることなるべし。元をグワン、月をグワツといふは、明かにグラン、グワツの轉なり。吳音に従へば元の韻と痕魂の韻と通するに至るなり。廣韻には元の下に魂痕同用とあり、而して廣韻は隋の陸法言の切韻に則りたる唐韻を増補したる書なり。

然るに爰に又難解の問題あり。晚唐時代の作なりと云はるゝ韻鏡には元の韻はその上去入の三聲の韻と共に、第二十二開合兩轉の三等韻として配置せられ、且つ其兩轉は外轉に屬す。さすれば元の韻はエン、エツの聲ならざる可からず、是れ能く漢魏音に合ふ北音系の音なり。痕魂の韻はその上去入三聲の韻と共に第十七、第十八開合兩轉の一等韻として配置せられ、且つ其兩轉は内轉に屬するオン、オツの聲なり。外轉の韻とは、全く其性質を異にし、兩者相通すべき者に非ず。元の韻を我吳音の如く響かすときは取りも直さず外轉より内轉に移りたるなり。

元と痕魂と一旦同用の韻として用ゐられ、しかも文物燦爛たる南朝の名家の詩歌に現はるゝに至りてより、其影響する所廣く、南北其音を異にする所ありと雖も、深く意に介せず、遂に音韻は音韻、詩歌は詩歌として、併び行はるゝに至りたることなるべし。韻鏡作製の時代には、北音にて遠く漢魏音の再興を見るに及びたるなり。(昭和十年二月廿三日)